研究室/学校紹介　臨床検査学教育 Vol.2, No.1 p.31～33, 2010.

香川県立保健医療大学

加 藤　亮 二*

I. 大学の概要

本学は各教室から映画でも小説でも有名な壺井栄が描いた『24 の瞳』の舞台となる小豆島が一望できる瀬戸内海の北東に位置し、臨床検査技師(20 名)、看護師・保健師・助産師(70 名)、大学院修士(8 名)を育成する全国でも最も小規模な大学の一つであります。

本学の歴史は意外に古く、昭和 33 年(1958 年)に香川県衛生検査技師養成所(2 年制)として創設され(祈念碑参照)、その後、香川県看護専門学校と合併後、平成 11 年に高松市牟礼町にある現在地に香川県立医療短期大学として開校されています。平成 16 年には 4 年制大学へと移行し、平成 21 年 4 月から大学院修士課程を併設しながら現在へ至っていますが、本学は『生命の尊厳を畏敬する深い人間愛とともに、高い教養と国際的な視野を兼ね備えた人材育成と保健医療従事者としての社会的使命を生涯にわたって探求し、科学的な思考力と創造性豊かな専門技術者を育成すること』を教育理念としています。

さらに本学の特徴として、"保健医療分野における科学者"として学位名を全国で初めて『修士 : 臨床検査学』、『学士 : 臨床検査学』、と名づけ、今後の臨床検査技師が担う真の臨床検査学の構築に重点を置いた教育体制をとっています。

1 年次の教育では人間形成に必要な教養科目を中心に専門共通科目および臨床検査技師を目指すための動機付け教育(例えば臨床検査体験実習など)について習得し、更には看護学科と協同したチーム医療、教養ゼミナール、1 泊研修旅行などを行っています。

2 年次になると本格的に専門基礎科目・専門科目が開始され、3 年次前期で一般的な学内授業を

写真 1　大学の全景

写真 2　祈念碑

*臨床検査学科学科長、大学院臨床検査学分野長(教授)　katou@chs.pref.kagawa.jp

終了し、3 年次後期に臨地実習（香川県立中央病院および香川県環境保健研究センター）を体験します。また、この時期には各教員と一緒に専門ゼミナールを通して卒業研究の内容を決定し、4 年次前期から卒業研究を開始します。4 年次後期には検診検査学、救急医療学、生殖補助医療技術学、先端医療技術学、リスクマネジメント、医療経済学、知的財産法（特許）、検査情報解析学、検査分析システム学、検査精度保証管理学など、臨床検査学におけるスペシャリストを育成するための多くの科目を選択履修できる体制を整えています。

これらの科目を担当する臨床検査学科の専任教員は、①大学院の臨床検査学分野では 15 名（教授 11 名、准教授 4 名）が病態機能検査学及び病因解析検査学の 2 つの領域を担当します。教授 11 名の内訳は医師 5 名、臨床検査技師 4 名、衛生検査技師 1 名、その他 1 名から成り、准教授 4 名のうち臨床検査技師 2 名、衛生検査技師 1 名、その他 1 名から構成されています。

学部教育では大学院との兼任者が多く、16 名（教授 6 名、准教授 4 名、助教 6 名）が担当しますが、臨床検査技師教員を中心とした教育システムを構築し、学生との距離の近い臨床検査学を目指しています。また、臨地教授制度も、平成 16 年に創設し、現場で活躍される臨床検査技師及び医師に対して臨地教授（准教授）の発令を行い、学外での臨地実習が円滑に進むよう配慮しております。各学年における学生への相談窓口や就職相談についてはそれぞれ担任 1 名、副担任 1 名を学年ごとに配置し、学生へのケアを行うようにしています。

II. 大学院紹介

平成 21 年度 4 月から、教育・研究体制をさらに充実させるために大学院修士課程を設置しました。構成は臨床検査学分野と看護学分野からなる保健医療学専攻とし、臨床検査学分野では 2 つの領域（病態機能検査学、病因解析検査学）を設け、① 病態機能検査学領域では、神経系、循環器、呼吸器、泌尿器など各器官、病理組織・細胞等についての病態解析と新しい検査技術の開発や高度先進医療におけるチーム医療での指導的役割を果たす人材養成を目指します。もう一つの ② 病因解析検査学領域では、病原微生物、免疫系、生体代謝に重要な生化学的マーカー、遺伝子・染色体及びその関連物質等、病気を引き起こす要因についてより専門性を深め、病因を解析するための臨床検査学を探究する分野です。さらに、この分野も新たな検査診断法を開発できるような研究能力と高い技術力を養い、臨床検査における学問の発展と高度先進医療に貢献できる高度専門職業人を養成する計画となっています。

本学大学院への入学定員は看護学科と併せ 8 名と少ないですが、臨床検査学分野における平成 21 年度の入学者数は 4 名、平成 22 年度入学予定数 6 名と順調に推移しています。内訳は現役学生が 5 名、社会人 5 名となっており、特に社会人においては地方で貢献する高度専門職業人としての人材育成を目指しています。

一方、本学大学院における特徴の一つとして、看護学科と協同して健康科学分野における科学的な検証システムの構築など、人々の健康志向への対応や健康増進に貢献できる人材を養成するため、両学科の科目を自由に履修可能な相互乗り入れ方式を導入しており、例えば健康生活支援方法論、健康心理看護学論、健康増進科学論、新食理学、疫学統計学、環境衛生論、チーム医療論などの科目を受講し、幅広い知識と患者への配慮ができる心と技能が得られるような試みを行っています。

今後、なるべく早い時期に後期（博士）課程の設置を目指すため、現在その準備を進めているところです。

III. 研究室紹介

大学院教育が開始され、やっと 1 年目を迎えますのでそれぞれの本学の各研究室の体制はこれから整える段階ですが、私、加藤研究室では助教 1 名、大学院生 1 名、22 年度から 2 名が入学予定ですので、計 3 名の院生となり、今後研究活動を本格的にスタートする計画です。

一方、本学のように附属病院を持っていない大学は、現場との共同研究体制や研究サンプルの供給についての問題を抱えていますので、これらに

写真３　大学院の学生

ついては今後解決しなければならない課題としてありますが、私個人的には、これまで多くの博士資格者の育成を行ってきた関係から、現在、病院等の開設者も多く、これらの方々との共同研究を通じて打破する計画です。研究内容については自己免疫に関係する自己抗原遺伝子の測定系の開発及び腫瘍マーカーに関する高感度測定法の開発等が主ですが、幸いにも動物実験室、培養室、免疫機器及び各種遺伝子機器類を有しており、また、これら研究設備を上野一郎教授（遺伝子検査学 ；22 年度 3 名入学予定）と共同で運営している関係から、互いに協力しながら研究体制を構築する計画となっています。

本学のような地方大学にとっては、これからすぐに到来します少子高齢化社会は大学の生き残りに向けて大変な時代となることが予想されます。入学する学生にとって『この大学で学べば何が有益であるか』を、見え(分かり)易くする大学造りを目指すつもりであります。